

(電子メール施行)

農技 第1300号

平成26年8月29日

各関係機関長 様

兵庫県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報 注意報 第1号を下記のとおり発表します。

県下全域でトビイロウンカの発生が確認されています。普通期栽培の水稻では、水田内で発生状況を観察し、発生の多いほ場では防除の徹底をご指導願います。

平成26年度 病虫害発生予察注意報 第1号
トビイロウンカの発生状況と防除対策について

- 1 対象作物 水稻（普通期栽培：ヒノヒカリ、山田錦 等）
- 2 病虫害名 トビイロウンカ
- 3 対象地域 県下全域
- 4 発生程度 やや多～多 広域で発生が見られ、多発生のおそれがある。
- 5 発生時期 9月上旬～水稻収穫期

6 発生状況について

- (1) 病虫害発生予察予報第4号発表（8月14日）では、本種が広域で発生していることと本種の増殖タイプである短翅型成虫の発生を報告しているところである。
- (2) 8月21日～28日に当所が実施した発生状況調査では、発生ほ場率が県北部29%（2/7ほ場）、県東部85%（11/13ほ場）、県西部100%（8/8ほ場）、県南部83%（5/6ほ場）、県平均77%（26/34ほ場）であり、過去10年間で最も高い。農業改良普及センターおよび病虫害防除員による調査でも、8月中旬以降に本種の発生報告が増加している。
- (3) 8月下旬から飛び込み後第2世代幼虫の発生が確認され始めている。上記調査において、最も密度が高かったほ場では、成・幼虫合計で2.2頭/株（払い落とし調査）であった。今後、第2世代虫の発生最盛期を迎え、要防除水準（5頭/株）を超えるほ場が増えると予想される。
- (4) 向こう1カ月間の気温は平年並で推移することが予想されており、本虫はさらに増殖すると考えられる。第3世代虫が9月中旬頃に発生し、「坪枯れ」を引き起こすおそれがある。
- (5) 「ヒノヒカリ」、「山田錦」等の普通期栽培品種では、ほ場での発生状況を十分に確認し、それに応じた対応が必要である。特にこれまで一度も薬剤防除を実施していないほ場や、箱施用剤のみのほ場では、本種が多発生している可能性が高い。

6 防除対策について

- (1) 収穫期が 9 月下旬以降となる作型・品種では直ちに薬剤防除を実施する。(図参照)
10 月以降に収穫期となるヒノヒカリ、山田錦等や無防除ほ場においては、坪枯れが生じる可能性がより高くなる。
- (2) 本種の雌成虫および幼虫は株元に生息し、発生初期はほ場内で局所的に存在するため、発見には広範囲を観察する必要がある。株をかき分けての目視調査が有効であり、ほ場内の発生状況を確認する場合は、少なくとも 3 カ所 (計 100 株) 以上の株元をよく観察する。
- (3) 粉剤、液剤を使用する場合は、薬剤が株元にいる成・幼虫に十分到達するよう散布する。粒剤では湛水状態を保ち、粉剤、液剤より早めに散布する。
- (4) 薬剤散布に当たっては、収穫前日数をよく確認し、防除薬剤は兵庫県農薬情報システム等を参考に選定し、農薬使用基準を守ること。

兵 庫 県 農 薬 情 報 シ ス テ ム

(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)



トビイロウンカ・長翅型成虫 (体長約 4 mm)



短翅型雌成虫 (体長約 3mm)



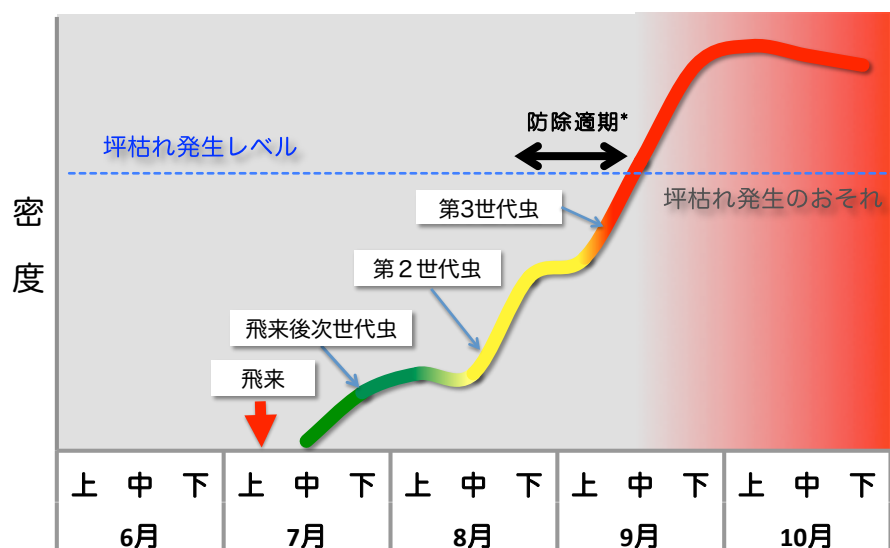
株元に群生する幼虫



トビイロウンカによる「坪枯れ」

長翅型成虫 : 移動能力が高く、毎年梅雨時期に海外から飛来する。飛来した次世代虫から短翅型成虫が発生する。

短翅型雌成虫 : 長翅型雌成虫に比べ産卵数が多く、高い繁殖能力を持っている。移動能力が低い
ため、短翅型成虫とその次世代虫はほとんど移動せず、稲体が枯れるまで吸汁し続けるので、同心円状に枯死株が生じ「坪枯れ」となる。



* 粒剤の場合は、粉剤、液剤の散布時期に比べて早めに施用する。

図 平成 26 年度トビイロウンカの発生推移（予測模式図）

この情報は、兵庫県立農林水産技術総合センターホームページに掲載
(<http://hyogo-nourinsuisangc.jp/>)

問い合わせ先	兵庫県病害虫防除所	0790-47-1222
--------	-----------	--------------